

ラグビーや釜石に恩義がある。何か恩返しを



社会人ラグビーが全盛期の人気を誇っていたころ、日本選手権の決勝では国立競技場の聖火台まで観客で埋まっていた。消防法なんてお構いなし。階段にも人が座っていた。マスコミへの露出も多く、メディアに取り上げられた機会を広告費に換算すると250億円、一説には275億円と試算する人もいました。

海外遠征に行く機会も多く、その帰り道に観光して帰ってきたことも。1980年には英国のウェールズと試合をする「世界選抜」のメンバーに選ばれました。新日鐵釜石に入ったおかげで、いろんな体験をさせてもらった。私はラグビーによって、ずいぶん「いい思い」をしたのです。日本代表や世界選抜に選ばれるなんて、高校時代には想像もありませんでした。

32歳まで現役を続け、引退してからはラグビーから離れました。指導者には向いていないとも思っていましたから。東日本大震災が起こってから考えたのは、「ラグビーを通じて恩返しをしたい」ということ。知らん顔はできなかったのです。

2011年5月に「スクラム釜石」

2011年5月、ラグビーによって復興を支援するNPO法人「スクラム釜石」を立ち上げました。「スクラムなら石山だろう」ということで、私が代表になっています。松尾（雄治）さんを担いで、新日鐵釜石のOBらが支える活動をスタートしました。

そして2019年に日本で開催されるラグビーのワールドカップ（W杯）を釜石市へ招致しようと検討を始めました。最初は「そんなの無理だ」と言われました。W杯を開催するにはスタジアムが必要であり、鉄道などの公共交通機関が充実していて、ホテルなどの宿泊施設が完備されていなければなりません。被災した釜石市は、すべての条件を満たすことができていないわけです。ゼロどころかマイナスからの出発になります。しかしW杯を主催する「ワールドラグビー」は「W杯を開催する社会的意義」という条件も評価の対象としたのです。私達は「それなら大いにある」と思いました。

スタジアム建設予定地で「富来旗」

2015年1月にW杯の関係者が開催候補地を視察しました。スタジアムの建設予定地は、津波で水没した小・中学校があった場所で、このときは、がれきの集積地となっていました。この視察のために「私たちが（大漁旗の）富来（フライ）旗を振りましょう！」と協力を申し出てくれた市内の福祉施設の関係者が延々と富来旗を振り続けてくれました。その光景を見たW杯関係者は「ファンタスティック」と感激してくれました。

その後3月に、岩手県と釜石市が共同でW杯釜石開催が決定したのです。W杯は復興の手段になるでしょう。なぜなら五輪やサッカーW杯に次ぐスポーツイベントであり、世界各国からラグビーの観戦に来る人、震災復興に関心を寄せる人たちが集まることになるからです。それまでに震災から復興するために支援してくれた世界の人たちに向けて、立ち上がったという姿を見せるとともに、感謝の気持ちを伝える場所にもなるでしょう。後日談ですが、W杯関係者は視察のとき、

何も無い土だけのスタジアム建設予定地で、富来旗を延々と振っていた姿を見て「ここで開催するべき」と思ったそうです。

建設工事に参加し、PR活動も

釜石鶴住居復興スタジアムは2017年4月に着工しました。私は、ラグビーW杯の招致の責任の一端は自分にもあると考え、何かしらW杯に関してお手伝いしたいとスタジアム建設工事の元請けである大成建設に直接お願いし、これまでの会社を定年退職後に再就職しました。仕事は管理業務なのですが、「現場に出してほしい」と願い出て、安全管理の合間に測量の補助作業で現場を走り回りました。測量を終えた場所に杭を打ち込み、構造物の位置だしをする作業をひたすら続けました。

スタジアム建設のための土地の整備は、震災復興交付金を使うことができませんでした。地面より上の建物は日本スポーツ振興センター（JSC）に働きかけ、サッカーにも活用できる建造物とすることで助成を受けました。自治体や企業からも資金提供はありますが、まだまだ足りません。W杯開催のためには16,000人を収容できるスタジアムが必要です。スタジアムの常設の観客席は6,000人なので、10,000人分の仮設スタンドが必要です。私達はW杯のPRのために東北で開催される自転車のロードレース等のラグビー以外のイベントにも出場し、開会式や休憩エリアで支援を募る活動などもしています。私たちがは喋るよりも行動で示す方が得意なので、体力勝負で活動しています。

W杯は復興のための一つの手段

若いころの私は、いつも人の後ろに隠れているようなところがありました。なぜ、現役の時には目立たなかったのに、今はこんなに人前に出て活動するのでしょうか。「あなたを突き動かすものは何ですか？」とよく聞かれます。それは、ラグビーや釜石に恩義があるから。何か恩返しをしなければと考えるようになりました。私は幸いにも運がよく、多くの人たちと縁を持つことができました。そして恩を受けてきました。その恩を直接返したいと思っても既に亡くなってできない人もいます。お世話になった新日鐵釜石時代に働いていた方のうち、何人かが東日本大震災で亡くなりました。チームメイトだった洞口（孝治）や神戸製鋼の平尾（誠二）は、志半ばで病に倒れました。お世話になった人たちに直接返せないなら、別の人に恩返ししていけばいいのではないか。それによって誰かが喜んでくれたらいいと思うようになりました。東日本大震災はこのような考え方を加速させるきっかけになったのです。

W杯を開催することで、世界各国から多くの人がやってくることでしよう。にぎやかになればそれでいいわけではありません。W杯は復興のための一つの手段と考えています。漠然としています。皆さんが笑顔になれることが復興かなと思っています。私はこの9月、異動で秋田県成瀬村へ勤務地が変わりました。W杯開催中は、どこかからこっそり釜石を見守ります。華やかなところが苦手ですから。復興のサポートを釜石の外からしていきたいですね。

（文・写真 若林朋子）

【略歴】

いしやま・じろう 1957年秋田県生まれ。能代工高（秋田）卒業後、新日鐵釜石製鉄所入社。新日鐵釜石の日本選手権7連覇（79～85年）を支えた。ポジションはプロップ。80～85年まで日本代表に選出、キャップは19。88年に現役を引退し、社業に専念。2012年4月から15年9月までは富山県内に赴任していた。東日本大震災からの復興を掲げて設立したNPO法人「スクラム釜石」代表。17年6月に定年退職し、大成建設へ再就職。釜石鶴住居復興スタジアムの建設に携わる。